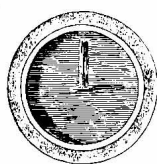


ガイドブック
現代文学理論

ラマーン・セルデン
栗原裕 訳 著



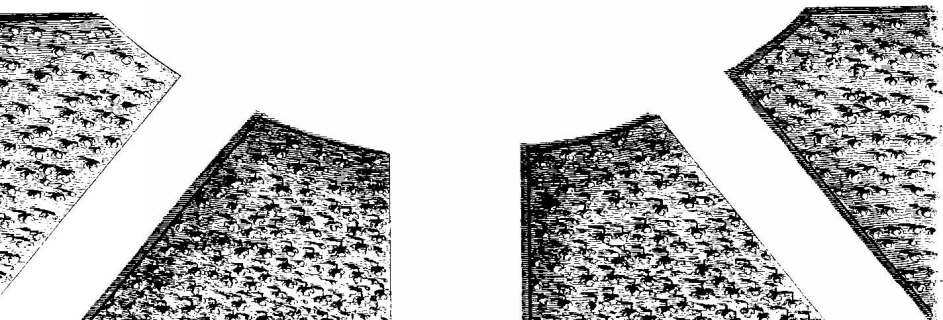
現代學論

ガイツ
ラマ・セルデン 著

栗原裕 訳

大修館書店

院圖書館章



訳者略歴

栗原 裕 (くりはら ゆたか)

1940年前橋市に生れる。1969年東京教育大学大学院文学研究科博士課程修了。現在、共立女子大学助教授。著書——『英語名句事典』(共編著、大修館書店、1984)、『物語の遠近法』(有精堂出版、1988)、『現代の批評理論』(共著、研究社出版、1988)、『共同研究・シェイクスピアの受容』(共著、共立女子大学、1989)ほか。訳書——ヴァーノン・リー『ことばの美学』(共訳、大修館書店、1974)、マーシャル・マクルーハン『メディア論』(共訳、みすず書房、1987)、ピーター・マン『本の本』(共訳、研究社出版、1987)、アーネスト・ジョーンズ『ハムレットとオイディプス』(大修館書店、1988)ほか。

ガイドブック 現代文学理論

© Y. Kurihara, 1989

1989年7月1日 初版発行 定価2,060円
(本体2,000円・税60円)

検 印
省 略

訳 者 栗原 裕
発行者 鈴木 荘夫

発行所 株式会社 大修館書店

(101) 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 東京 (294) 2221 (大代表) / 振替 東京9-40504

印字・製版・印刷・製本／図書印刷
装幀／高麗隆彦

ISBN4-469-21154-0 Printed in Japan

目次

序 章 3

第一章 ロシア・フォルマリズム 13

フォルマリズムの歴史的発展 15 / 技巧としての芸術 18 / 物語（ナラティヴ） 25 /
動機づけ（モティヴェーション） 27 / 優勢なるもの（ザ・ドミナント） 30 / バフ
チン学派 33 / 美的機能 39

第二章 マルクス主義理論 43

ソヴィエト社会主義リアリズム 48 / ゲオルグ・ルカーチ 53 / ベルトルト・ブレヒ
ト 58 / フランクフルト学派とベンヤミン 63 / 構造主義的マルクス主義 70 / 最
近の展開——イーグルトンとジェイムソン 78

第三章 構造主義理論 93

言語学的背景 95 / 構造主義ナラトロジー 102 / メタファーとメトニミー 114 / 構
造主義詩学——ジョナサン・カラ—— 119

第四章 ポスト構造主義理論 127

- ロラン・バルト—複数性を示すテクスト 131 / ジュリア・クリステヴァ—言語と革命
 140 / ジャック・ラカン—言語と無意識 144 / ジャック・デリダー—ディコンストラクシ
 ヨン 150 / アメリカのディコンストラクション 161 / 言述と力—フーコーとサイード 178

第五章 読者中心の理論 187

- 主観による展望 188 / ジェラルド・プリンス—語りかけられる人 194 / 現象学 197 /
 ヴォルフガング・イーザー—含意された読者 199 / ハンス・ローベルト・ヤウス—期
 待の地平 204 / スタンレー・フィッシュ—読者の体験 208 / ミシェル・リファテール
 —文学の能力 212 / ジョナサン・カラー—読みのコンヴェンション 216 / ホランドと
 ブライヒ—読者の心理学 219

第六章 フェミニズム批評 227

- フェミニズム理論の問題 229 / ミレットとバレット—政治的フェミニズム 234 / 女性
 の著作と女性批評 240 / フランスのフェミニズム批評理論 249

訳者あとがき 265 / 読書ガイド 290 / 索引 304

ガイドブック
現代文学理論

序
章

最近まで、文学の普通の読者、いや専門の文学批評家さえもが、文学理論の発達について心を煩わせるいわれなどなかった。理論というのはちょっと深遠な専門分野で、いろいろある文学の分野でも事実上文学批評家を装う哲学者といった態の少数の人たちにだけかわるもの、そう思われていた。文学にかんする議論は、それが新聞にのる書評にせよ、ラジオやテレビの芸術番組にとり上げられる書評にせよ、普通の読者に向けたものであった。たいていの批評家はドクター・ジョンソンと同じように考えていた。偉大な文学は普遍的であって、人間生活について一般的真理を表現する、したがって、読者にはなんら特殊な知識も言語も必要ない、というふうに。批評家は、作家個人の経験、人間的関心、想像的才能、作品の社会・歴史的背景、偉大な文学の詩的美しさなどについて、快い良識を語ってきた。言い換えれば、批評はわれわれの抱く世界像、読者としてのわれわれの自画像を混乱させることなく文学について語っていた。それから、一九六〇年代の末になってのことである。事態が変わりはじめた。

過去一五年ほどのあいだ、文学の研究者たちはこの常識というコンセンサスにたいするいつ果てるとも知れない挑戦の連続に悩まされてきた。事態をいっそう悪化させたのは、異様な雑音の多くが海の向こうからやってきたことであった。イギリス人というのは大陸からやってくる知的重量級を軽くあしらうことにたけている。ドイツの理論屋はどうも実

用に向かない、フランスの連中は度しがたき合理論者だ、などと、しばしば文句をつける。こんな具合にして、われわれはわが文化の国粋性をかろうじて支え、外国からの侵入者たちを水ぎわでくいとめるのである。

一九八〇年、コリン・マッケイブがケンブリッジ大学の終身任用を得そこなったとき、「構造主義」がジャーナリズムを賑わした。構造主義者たち、およびケンブリッジにおけるその同盟者たちの抗議があつて、ドクター・リーヴィスの母校の奥深くに侵入者のいることに、高級紙が気づかされたのであつた。『タイムズ・リテラリー・サプルメント』は機を逃さず、その醜聞とその知的背景にかんして特集号を発行した。同紙の記事を読んだ多くの一般読者たちは、「マッケイブ事件」をきっかけに理論家たちが公衆に向かって自身を説明するのに接して、以前にも増して「構造主義」なるものに困惑したにちがいない。マッケイブの構造主義にはマルクス主義の気配が漂っていると、マッケイブの構造主義へのアプローチは実はポスト構造主義から構造主義を批判するものだと、マッケイブの仕事に影響を与えている主たるものはフランスの哲学者ジャック・ラカンの精神分析的構造主義であるとか、そんなことを聞かされて、ただでさえ根深い偏見をいっそう抜きがたいものにしただけであつた。

この課題に読者を案内する手引きを書くという逃げ出したくなるような仕事をあえて引

き受けることに決心したのは、主として、現代の文学理論の提起する問題が重要なもので、交通整理をする努力が無意味でないからである。例のごとく理論を軽蔑し放棄してみても始まらないことを、いま、多くの読者は感じている。なにを拒絶せよと言われているのか、読者は正確に知りたいであろう。さまざまな複雑で争点の多い概念を簡潔に要約して見せようとすれば、理論の体内からその血液を抜き出すことになるであろうし、懷疑家たちの牙の餌食になりかねない。これは避けられないことだ。けれども、読者はその課題に関心を持ち興味を覚えているがゆえに、薄味の食物でも本来の理論の持つ正真の刺激のある香味へ到る予備段階として受け入れる用意ができています。そう、わたくしは考えた。少ないスペースで多くのことを言おうとして、いくつかあまりにも単純化しすぎたところのあることは認めなければならぬ。このような止むをえぬ圧縮と大まかな概括が重大な誤解を招くことはなからうと思う。さらに勉強される人のために、本書の末尾に段階をつけて「読書ガイド」を付してある。読者は難易さまざまな任意のアプローチを試みる事ができるはずである。

なぜ、われわれは文学理論に心を煩わせなければならないのか。騒ぎのおさまるのをただ待っているわけにはいかないのか。徴候を見ると、理論の移植はうまく根づいたようでは、予見できる将来はこのまま行くかもしれない。新しい雑誌が創刊され、新しい課程が

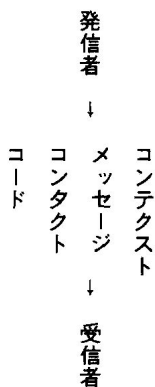
創設され、学会が理論の問題のために開催されてきた。この新しい批評の自覚が、新しい世代の文学の教師たちのなかに目覚めても、驚くにあたらない。この事態がわれわれの読み書きの経験と理解にどのような影響を及ぼすか。

第一に、理論を強調すれば、読みが無垢な活動であるとする考えが危うくなる。もし小説における意味の構築、詩における観念の存在について自問するなら、もはやわれわれは素朴に小説の「現実性」や詩の「誠実性」を受け入れるわけにはいかない。読者のなかには、これまでの幻想を抱きつづけ、無垢の喪失を嘆く人がいるかもしれない。けれども、真面目な読者なら、近年主要な文学理論家たちが提起している深い問題を無視するわけにはいかない。

第二に、新しい文学の見方はわれわれの読みに不毛な作用を及ぼすどころか、われわれのテキストとのかかわりを活性化することもある。もちろん、自身の読みについて反省しようという欲求が人になければ、いかなる種類の文学批評もほとんど提供するものを持たない。あるいはまた、理論とか概念とかいうものが文学作品にたいする反応の自発性を枯らすだけであると信ずる人もいるかもしれない。そういう人は、文学について自発的になされたと思ひ込んでいる発言が古い世代の理論に無意識のうちに依存していることを忘れているかもしれないのだ。「感情」「想像」「才能」「誠実」「實在」とかについて語であ

ろうが、それは時の経過によって認可され常識の言語の一部となった死んだ理論で満ちている。文学の読みにおいて冒険と探究をむねとするためには、文学についての思想においても冒険をむねとしなければならない。

文学理論が異なれば、その提起する問題も異なると考えることができる。さまざまな理論が、作者、作品、読者、あるいは普通われわれが「実在」と呼んでいるものを根拠にして問いを問うかもしれない。もちろん、いかなる理論家と言えども自身が部分的偏りを見ていることは認めないものであり、選ばれたアプローチの枠組みの内部で他の観点を考慮することは通常ないものである。つぎに示す言語コミュニケーションの模式図はロマーン・ヤーコブソンが工夫した図であるが、さまざまな観点を識別するのに役立つ。



発信者が受信者に向けてメッセージを送る。メッセージではコード（普通、発信者と受信者の両方が共通に知っている言語）を使う。メッセージはコンテキスト（あるいは指示

物)を持っていて、コンタクト(肉声とか、電話とか、文字とかのような媒体)によって伝達される。文学を論ずる目的のためにはコンタクトは省略していい。それは文学理論家にとつてとくに関心がない。通例、それは印刷されたことばであるからだ(演劇の場合を除いて)。だから、先の図をつぎのように書きなおしてかまわない。

コンテキスト

作家

作品

読者

コード

ヤーコブソンは図のなかの個々の要素にそれぞれ対応する言語機能をつぎのように振り当てている。

指示的

喚情的

詩的

含蓄的

メタ言語的

もし発信者の観点を取れば、言語の喚情的用法に注意を向けることになり、もしコンテキストに焦点を合わせれば、言語の指示的用法を抽出することになる、等々。文学理論もま

たいずれか一つの機能に力点を置く傾向がある。これから論ずる重要な理論を例にして、図式的につきのように位置づけて差しつかえないであろう。

マルクス主義

ロマン主義

フォルマリズム

読者中心

構造主義

ロマン主義文学理論は作家の精神と人生を強調する。読者中心文学批評（現象学的批評）は読者の経験に焦点を合わせる。フォルマリズム文学理論は書き物自体を他から分離させ、その性格に集中する。マルクス主義文学批評は社会的および歴史的コンテクストが基本であると見なす。そして、構造主義詩学はわれわれが意味を構築するのに使うコードに注意を向ける。それぞれのアプローチがもっともうまく行った場合には、文学コミュニケーションの他の次元を完全に無視するようなことがない。たとえば、マルクス主義批評で、作家、享受者、テクスト、すべてが広く社会学的展望のうちににおさめられる。フェミニズム批評がこの模式図に位置を与えることができないのは、それがそれ以外の理論に当てはまるような意味での「アプローチ」でないからである。フェミニズム批評はいちじるしく革新的な立脚点からすべてのアプローチをグローバルに再解釈しようと試みるもので

ある。

わたくしは現代の批評理論について包括的な図を描こうとはしなかった。もっとも挑戦的で顕著ないくつかの傾向に読者を招待するための手引きを書こうとしている。たとえば、神話批評は省略した。それには長くて多様な歴史があり、ギルバート・マレー、ジェイムズ・フレーザー、モード・ボドキン、カール・ユング、ノースロップ・フライといった人たちの仕事が含まれるにもかかわらずである。神話批評はアカデミックあるいはポピュラーな文化のなかに入ってきていず、これから点検するいくつかの理論ほどに力強い挑戦を既製の観念に加えていない。そう、わたくしには思えたからである。